

大鏡 三舟の才

ある年

①ひととせ、入道殿の、大井川に逍遙せさせ給ひしに、

漢詩文

お 分け になつて

作文の舟・管弦の舟・和歌の舟と分かたせ給ひて、

それら

すぐれている

お

乗せ

になつ

たが

その道にたへたる人々を乗せさせ給ひしに、

単純接続

②この大納言殿の参り給へるを、

は

あ

は

ど

乗りなさだろう

か

③入道殿、「かの大納言、いづれの舟にか乗らるべき。」

おつしやつた

ので

とのたまはすれば、

大納言殿（公任）は

ましよう

おつしやつ

お

になつた

歌

④「和歌の舟に乗り侍らむ。」とのたまひて、よみ給へるぞかし、

の

が 寒い

ので

を

ない

は

いない

⑤小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき

山がみんな紅葉の錦を着ているようだ  
すばらしい歌を

願い出で

なさつた

甲斐

があつ

お詠みになつた

ものですなあ

⑥申し受け給へるかひありて、あそばしたりな。

終助・詠嘆

公任

自身

⑦ 御みづからものたまふなるは、

舟

「作文のにぞ乗るべかりける。」

のがよかつた

なあ

適當

詠嘆

もし

そうしてこれくらい

歌と同じくらいの

漢詩

作つ

た

なら

ば

⑧ さて、かばかりの詩を作りたらましかば、

接助

反実仮想

名声が上がるような

まさつ

ただろうに

名の上がらむこともまさりなまし。

婉曲

完了 反実仮想

残念な

こと

だなあ

⑨ くちをしかりけるわざかな。

和歌に関しては名声が上がっていたが、漢詩はそれほどでもなかったから、漢詩を詠めばよかつた

入道

それにしても

が

どの

公任は

舟

乗ろう

思うか

おつしやつ

た

ために

⑩ さて、殿の、『いづれにかと思ふ。』とのたまはせしになむ、

格助理由

得意な気持ち

がし

自然と

た

おつしやつたそう

だ

我ながら心おごりせられし。』とのたまふなる。

一つの道が優れている

こと

さえ

たいしたこと

で

のに

⑪ 一事のすぐるだにあるに、

このようにいづれ

秀で

なさつたという

の

かくいづれの道も抜け出で給ひけむは、

過去伝聞

昔

に

ございません

です

いにしへも侍らぬことなり。